

“No worst, there is none”一考

荻野 勝

Another thought on “No worst, there is none”

Masaru OGINO

【要旨】

本論では、19世紀イギリス詩人のジェラード・マンリー・ホプキンズの晩年の作品“*No worst, there is none*”の表現方法について分析する。ホプキンズは、20歳の頃イギリス国教会からカトリックに改宗し、さらにイエズス会に入会した。カトリックとして神への深い信仰を持っていたホプキンズは、晩年苦悩に満ちた人生を迎えることになる。本論では、その苦悩がこの詩の中でどのように表現されているかを分析する。シェークスピアの『リア王』からの影響、「心の中の山」という心象風景、音声やリズムを工夫した表現などに特に注意を払いながら、この詩の特徴を捉えてゆく。最後に、この詩の中の「私」とは誰のことか、について考察する。

キーワード：ジェラード・マンリー・ホプキンズ、ブライト・ソネッツ、ダーク・ソネッツ、イエズス会、ウィリアム・シェークスピア

I

イエズス会司祭でもある詩人ジェラード・マンリー・ホプキンズ(1844-1889)は、彼が短い期間に集中して多くの詩を作成した時期がふたつある。ひとつは彼がイエズス会士として叙階される最終段階の課程として、ウエールズ地方で神学を学んでいた1877年頃である。この頃の詩には“*Spring*”、“*The Windhover*”、“*Pied Beauty*”等のソネッツがあり、それらには自然美への愛着、神への賛美、彼の神への信仰が描かれていて、ブライト・ソネッツと呼ばれている。例えば“*Spring*”のオクテットでは、草木の勢いよく成長する様子、ツグミの鳴き声が森にこだまする様子、あたかも青空のキャンバスに絵を描いているように梨の木が風に揺れている様子が描かれている。セステットではそのような自然美は原罪による墮落前のもので、それが原罪によって曇ってしまううちに、神にオクテットに描かれたような自然美を「お受け下さい」とお願いしている。

ホプキンズが集中して多くの詩を作成したもうひとつの時期は、晩年彼がイエズス会士としてアイルランドに派遣された時期の1885年頃であった。この時期に彼は、イエズス会士として彼に与えられた仕事も上手くこなせず、さらに周りのアイルランド人と良い関係を築くことができずに、苦悩に満ちた日々を送っていた。この頃の詩には、以前のブライト・ソネッツとは一転して、詩人に襲いかかる苦悩やそれから逃げ惑う詩人の姿、神と格闘する詩人が描かれていて、ダーク・ソネッツと呼ばれている。そのダーク・ソネッツのひとつに“*No worst, there is none*”がある。

本論では、“*No worst, there is none*”を詳細に読みながら、彼の苦悩がどのように表現されているかを考察する。

まず、以下に原詩と訳詩を掲載する。

(原詩)

No worst, there is none. Pitched past pitch of grief,
 More pangs will, schooled at forepangs, wilder wring.
 Comforter, where, where is your comforting?
 Mary, mother of us, where is your relief?
 My cries heave, herds-long; huddle in a main, a chief-
 woe, world-sorrow; on an age-old anvil wince and sing—
 Then lull, then leave off. Fury had shrieked 'No ling-
 ering! Let me be fell: force I must be brief'.
 O the mind, mind has mountains; cliffs of fall
 Frightful, sheer, no-man-fathomed. Hold them cheap
 May who ne'er hung there. Nor does long our small
 Durance deal with that steep or deep. Here! creep,
 Wretch, under a comfort serves in a whirlwind: all
 Life death does end and each day dies with sleep.

(訳詞)

最悪なんてもものはない。悲しみの極みをはるかにしのぐ、
 もっと多くの苦しみが、先の苦しみを手本にしながら、より激しく絞る。
 精霊よ、あなたの慰めはどこにあるのですか。
 聖母マリアよ、あなたの助けはどこにあるのですか。
 私の叫びはうねる。それは動物の群れのように長く続く。大海で群がり、最大の
 苦しみ、世界の悲しみとなる。古くからの金床でひるむような音をあげ、そして鳴り響く。
 そして和らぎ、そして消えてゆく。あたかも復讐の女神がこう叫んだかのようだ。「もたもたし
 てはいられない。私を残酷であらせてほしい。なぜなら私は短時間でしなければならぬから
 だ。」
 ああ、心よ、心には山々がある。断崖絶壁で
 ぎょっとするような険しさで、誰もその深さを考えたこともない。そこにしがみついた
 ことのない者は、たいしたことないと思うだろう。また我々の小さな忍耐では
 その険しさ深さには太刀打ちできない。さあ。這え。
 惨めな男よ。嵐の中支えになる慰めのもとへと。すべての
 生は死が終わらせ、毎日は眠りとともに死んでゆくのだ。

(萩野試訳、一部安田章一郎・緒方登摩訳『ホプキンズ詩集』、『NONDUM』第11号の安田章一
 郎訳の巻頭詩を参照)

II - 1

この詩では、第1行から「私」に襲いかかる苦しみのイメージが描かれている。「私」に襲いか
 かる苦しみの極み (pitch) は、その瞬間はこれ以上のものはないと思われるのだが、次の瞬間に
 それ以上の苦しみが「私」を絞る (wring)。苦しみのものが擬人化されていて、一つの苦しみ

の集団が彼に襲いかかっている瞬間、さらに大きな苦しみが彼を襲うべく研ぎ澄まされ集合している (schooled)。

表現方法を見てみると、まず大きな特徴として、冒頭を「最悪なんてものはない」という意味の “No worst” で始め、これにより読者の注意を引きつけている。また次の “Pitched past pitch of grief,” は、子音 /p/ に頭韻を踏ませ、3度も連続して /p/ が繰り返されることにより、「悲しみの極み」が次から次に押し寄せてくる様が強調されている。また詩の意味内容に関しては、ピーター・ミルワードの指摘するように、シェークスピアの『リヤ王』からのエドガーの台詞からの影響があるであろう。下に示す4行はエドガーの台詞である。

“O gods! Who is't can say, 'I am at the worst'?

I am worse than e'er I was ...

And worse I may be yet; the worst is not

So long as we can say, 'This is the worst'.” (iv. 1)

II-2

第3行、第4行では、「私」は “Comforter, where, where is your comforting? / Mary, mother of us, where is your relief?” と言って、精霊や聖母マリアに救いを求める。しかし、この2行は精霊や聖母マリアに救いを求めるというよりも、絶望の淵にある「私」が神に向かって発している「叫び声」とも取れる。また、この叫び声は、彼が数ヶ月後に書いた詩 “I Wake and Feel” では、 “cries like dead letters sent / To dearest him that lives alas away!” のように、遙か遠くに存在する神へと送られるのだが、届くことのない手紙に喩えられている。

II-3

第5行から第7行の前半では、ホプキンは「私」の叫びを様々なイメージを使って表現している。叫びはうねりをあげながら (heave)、長い列を作って移動する家畜の群れのように続いてゆく (herds-long)。その様子は、ブライト・ソネッツの “Spring” においては “the racing lambs too have fair their fling.” と表現されているような、子羊たちの無垢なる自然界の中での歓喜に満ちた躍動とは状況がまったく異なる。暗黒の中、苦悩に襲われる度に発せられる彼の叫びが波打ちながら膨れあがっていく様が、 “heave, herds-long” という2語で集約され、表現されている。その後、この叫びは、大海で大きくうねりをあげる (huddle in a main) 波、最大の苦しみ (a chief / Woe)、世界の悲しみ (world-sorrow) として形容されている。つまり、家畜で表現されたものが、海 (main)、主 (chief)、世界 (world) のように、その意味の深さや大きさがさらに拡大されているのである。このことは、ホプキンの苦しみが大きくなることを、比喩となる単語を使い分けることによって表現し、ホプキンの「苦しみ」に対するホプキン自身の表現手法の工夫が見られると考えられる。

II-4

第6行の途中からは、「私」の叫び声の発せられる様子は、古くから伝わる金床 (age-old anvil) を打ったときに発せられる音に喩えられている。それは、まずは怯むような音を発し (wince)、次に鳴り響き (sing)、次に少しずつ収束してゆき (lull)、最後に鳴り止む (leave off)。しかし、金床は次々に打ちつけられるものであり、ひとつの音が終わらないうちに、また次の音が発せら

れるのである。つまり、「怯む・鳴り響く・収束する・鳴り止む」という過程が、途切れることなく連続する。この様子は、第5行で“herds-long”と表現されているように、金床によって発せられた音は、一つ一つが波動を持っているが、その全体が隊列をなして移動しているようにも取れる。したがって、第5行の“herds-long”と第6行第7行の“on an age-old anvil wince and sing-／Then lull, then leave off”は、使用している単語は異なるが、ホプキンスの苦悩がますます膨れあがっていく様子を、共に表現しているのである。

ここで“on an age-old anvil wince and sing-／Then lull and leave off”の部分の音声やリズムの効果にも目を向けてみよう。金床が怯みながらも音を発する様は、“wince and sing”というように同程度に強く発音される／i／の母音で表現されている。また、詩の原則的な韻律としては、イタリックで示した部分を強く発音する。しかし実際に声に出して読む場合は“Then lull and leave off”の部分を沈んでいくように読む。このように、この部分は「弱強」の韻律で進んでいくが、意味的には金床から発せられる音が次第に消滅していく描写でもある。つまり、第7行の出だしの“lull”と“leave”は本来比較的強く読まれなければならないが、上の理由により、ここでは「弱強」のリズムは維持したまま、弱く読まれる必要がある。このような金床の音の沈んでゆく変化の様子を比喩的に用いた展開による読み方やリズムの変化の表現方法を、ホプキンスが工夫していることによって、この詩が読者に対して「私」の苦しみを感じ取る上で強い印象を与えるものとなっているのである。

II-5

第7行の途中から第8行までの、復讐の女神（Fury）の言葉、“No ling-／ering! Let me be fell: force I must be brief.”は、次々と金床が打ちつけられるように、「私」が次々と襲いかかってくる苦しみによって苛まれていることを表している。“ling-／ering”のように一語が行を跨がっているのは、上の金床の残響がしばらく続く様子を表現していると取れる。しかし復讐の女神は、苦痛は短期間に鋭いもの、より身に応えるものでなければならないと叫ぶ。同時に、逆説的に、苦痛は苦しければ苦しいほど、それは短時間に終わるということも暗に示していると言える。

III-1

セステットの第9行において、「私」は“O the mind, mind has mountains;”と自分の「心」の中のことを語り始める。「私」は、「心」には「山々」が存在すると言う。しかもその山々は絶壁の崖（cliffs of fall）で、とてつもなく恐ろしいものである。そしてその山々は、心の中に存在しているにもかかわらず、“no-man-fathomed”という表現があるように、その険しさは誰も推し量ることができないものなのである。この部分にも、ミルワードの指摘するように、『リヤ王』の影響が見られる。以下に該当部分を示す。

“How feaful
And dizzy 'tis to cast one's eyes so low!
… Halfway down
Hangs one that gathers Samphire, dreadful trade!
… I'll look no more
Lest my brain turn, and the deficient sight
topple down headlong.” (iv. 6)

ここでその「山々」について少し考えてみよう。この「山々」とは、いつも心に存在するものではない。それは苦悩に苛まれ、絶望に陥った者だけが心に持つ「山々」である。しかも、絶望に陥った者は、心の「山々」から落ちないように、それに必死でしがみついたのである。

それが、第6行の途中からの“Hold them cheap/May who ne'er hung there.”という表現が意味するところであり、絶望を経験したことがない者は、心の山を体験したことも、そこから落ちないようにと必死にしがみついたこともないのであり、その山の険しさ深さは分からないのである。そしてその次の“Nor does long our small/Durance deal with that steep or deep.”という表現により、心の「山々」の険しさや深さは我々の忍耐（Durance）では辛抱することができないものであることが分かる。

さて、「私」が苦しみを体験したその比喩として描かれている「心の山々」であるが、読者がこの詩を読むときには、それをどのように捉えるのであろうか。おそらく読者は“O the mind, mind has mountains;”と読んで、「山々」を心の中に存在するものとして想像する。もちろんその「山々」は“cliffs of fall/Frightful, sheer, no-man-fathomed.”とあるように、切り立った険しい山々である。

そして“Hold them cheap/May who ne'er hung there.”まで読むと、「私」がそこから下に落ちまいと必死にしがみついている様子を想像し、さらに“Nor does long our small/Durance deal with that steep or deep.”まで読み進めると、「私」がしがみついている「山々」の険しさ、深さ、恐ろしさを改めて想像することになり、「私」が絶望を必死に耐えている様子だけでなく、心の「山々」の恐ろしさの印象が読者の心に残るのである。

Ⅲ－2

この部分は、音声の点でも、意味が強調されている。まず、“O the mind, mind has mountains;”では、/m/音の頭韻によってリズムを生み出している。次の“cliffs of fall/Frightful, sheer, no-man-fathomed.”では、“cliff”、“fall”、“Frightful”、“fathomed”の/f/音を多用することにより崖の恐ろしさを強く表現している。なぜならば、唇歯音/f/は、発音した際に強い印象を与える音であるため、ここに読み手の意識が集中していくからである。また、第11行から12行の“Nor does long our small/Durance deal with that steep or deep.”の部分では、“long”は「長く持ちこたえられない」という意味で使われ、“small”は「小さな」忍耐の意味で使われている。したがって“long”や“small”の長母音/o:/の反復は、人間の忍耐力あるいは命のはかなさを強調することにつながっていると考えられる。また詩行の後半の“deal”、“steep”、“deep”の長母音/i:/は、ほぼ等間隔で発音される。このことにより、はっきりと長母音を読み手の心に浸透し、その語の持つ意味がより強調される。「山々」の険しさ、深さに比べ、それに太刀打ち（deal）できない人間の非力さをあきらめとともに受け入れる「私」の人生に対する態度が垣間見られるようだ。この行では、さらに/i:/の音が“creep”へと続く。意味的には“deep”で前の文が終わっているのであるが、音的にはまだ詩の流れは続いていることになり、読者は、自然と次の詩行へと目を移すことになるであろう。ここでのホプキンズの表現の工夫として、音的に流れを継続させてはいるが、内容は異なった世界へと読者を導いているのである。

Ⅲ－3

第12行後半の“Here! creep/Wretch, under a comfort serves in a whirlwind;”では、「私」は自分自身に、吹き荒ぶ嵐の中、かすかに「慰め」と思えるものの下に潜って、嵐が過ぎゆくのを耐えるように言っている。ここでは、人に「慰め」を与えてくれるものは、第3行で「私」が呼び

かけている精霊 (Comforter) ではなく、どんなものでもその下に潜り込めるもの (a comfort serves in a whirlwind) である。この部分は、ミルワードの指摘しているように、『リヤ王』中のエドガーの以下の一節の影響を受けている。以下にエドガーの台詞を示す。

“Gracious my lord, hard by here is a hovel;
Some friendship will it lend you 'gainst the tempest …
Here is the place, my lord; good my lord, enter;
The tyranny of the open night's too rough
For nature to endure.” (iii. 2, 4)

Ⅲ－４

最後の“all/Life death does end and each day dies with sleep.”では、死が苦悩の一生を終わらせるように、眠りが苦悩の一日を（一時的な死で）終わらせるという言葉で結んでいる。「死」という言葉を持ってのみ「私」の苦悩を終わらせることができるとしか考えられない、「私」の八方ふさがりの状態を表現したまま、この詩は終わる。死は、本来なら避けたいものであるが、死をもってのみ自身の苦痛を終わらせることができない「私」のやるせなさ、辛さが表現されている。

この詩行では、“death”、“does”、“end”、“and”、“day”、“dies”のように子音 /d/ が多用されている。この濁ったような暗い (dark) 音の連続は、「私」のやるせなさ、なすすべのなさを強調している。しかし同時に、最後の単語“sleep”の子音 /l/ は明るい子音である。このことは、“sleep”という語の直前まで漂っている暗い (dark) 世界から脱し、「眠り＝死」の中にわずかながらの希望を見出したいという「私」の気持ちを表していると言える。このように、子音に内在する明るさや暗さという雰囲気をも、ホプキンは表現技法として駆使していると考えられるのではなかろうか。

この詩では、冒頭の“No worst”をはじめ、7から8行目の“No ling-/ering”、10行目の“no-man-fathomed”、11行目の“ne'er”、“Nor”のように、否定語が多用されている。このことは、「もうごりごりだ」、「もう苦しみは嫌だ」という苦しみに耐えられない「私」の姿、人生に後ろ向きな「私」の姿を表してしているものとして、この“No worst, there is none”において、苦しみの象徴として大きな意味を持っているのではないかと推察するものである。

Ⅳ

最後に、この詩の「私」とは誰のことであろうか。作中人物の「私」と詩人とを区別することが必要な時もあるだろうが、この詩の場合は「私」とはホプキンズ自身のことであろうと思われる。ホプキンズがアイルランドで経験した苦悩に満ちた自分自身をこの詩の中で表現することにより、一時的にせよ苦悩からの解放があったのかもしれない。あるいは、詩の中の「私」の状況を表現することにより、詩人自身の状況を客観視できたのかもしれない。

しかし、韻律や脚韻などソネットとしての形式を踏襲し、さらに14行のうちの11行で行跨がりになっており、その上に音声やリズム面での工夫も施すなど、意匠を凝らしたこの詩をホプキンズ自身の苦悩を表現するために作成したというのは、驚くべきことである。

参考文献

Gardner, W.H. and N.H. MacKenzie ed. *The Poems of Gerard Manley Hopkins*. Oxford: Oxford

- University Press, 1984.
- MacKenzie, Norman H. ed. *The Later Poetic Manuscripts of Gerard Manley Hopkins in Facsimile*. New York: Garland Publishing Inc., 1991.
- MacKenzie, Norman H. ed. *The Poetical Works of Gerard Manley Hopkins*. Oxford: Clarendon Press, 1990.
- Milward, Peter S.J. *A Commentary on the Sonnets of G.M. Hopkins*. Tokyo: The Hokuseido Press, 1979.
- Robinson, John. *In Extremity*. Cambridge: Cambridge University Press, 1980.
- 緒方登摩編注『ホプキンスのソネット』研究社 1993.
- 安田章一郎、緒方登摩訳『ホプキンス詩集』春秋社 1994.
- 安田章一郎訳「悲痛の極み」、『NONDUM』11（2008年2月）、1.

本稿は、2009年5月30日に日本ホプキンス協会第37回連絡総会（於上智大学）にて行った口頭発表「“No worst, there is none”と“（Carrion Comfort）”におけるイメージの力について」を加筆修正したものである。

